

16世紀フィレンツェ公妃エレオノーラ・ディ・トレドの自己表象
—パラッツォ・ヴェッキオ内、「公妃の間」の装飾の図像解釈—

千葉大学 太田 智子

1539年にフィレンツェ公コジモ一世(1519-1575)と結婚したナポリ副王の娘エレオノーラ・ディ・トレド(1522-62)は、多くの子供をもうけて、コジモが唯一の後継者であったメディチ家の存続をより確かなものとしたことで賞賛された。しかしながら、近年の研究は、彼女が積極的な商業活動、ユダヤ人保護、フィレンツェへのイエズス会の受入れ等々を先導しながら、高い政治能力を示していたことを明らかにしている。絶対主義国家の建設途上にあったコジモは、その基礎を築く過程で、パラッツォ・ヴェッキオを二度にわたり大規模に改装し、共和政時代の市庁舎から君主の宮殿、政治の中心へとその機能を転させた。

この建築の三階に位置する公妃の居住空間は、1540年代からジョヴァンニ・バッティスタ・デル・タッソの監督下で改装が進められ、リドルフォ・デル・ギランダイオが装飾した「緑の間」(1540-42)とブロンズイーノがフレスコ画を描いた公妃の個人礼拝堂(1540-45)、そしてサルヴィアーティが装飾した書斎(1545以降)が完成した。ヴァザーリの指揮下に進められた二度目の改装期間中には、共和制時代に執政官がいた諸室が、1561年から62年にかけて、ジョヴァンニ・ストラダーノによって「公妃の間」へと改装された。

本発表で対象とするこの「公妃の間」は、四つの部屋から構成されており、それぞれの部屋が四人の「著名な女性達」に捧げられている。すなわち、ジョヴァンニ・ヴィッラーニの『フィレンツェ史』から採られたフィレンツェ人のガルドラーダ、ホメロスの『オデュッセイア』に著されたオデュッセウスの妻ペネロペ、『旧約聖書』の「エステル記」から採られた王妃エステル、そして『ローマ建国史』に語られたサビニ族の女性達である。「著名な女性達」とは、ボッカッチョの『女傑伝 De claris mulieribus』以来の、ルネサンスが培った文学的伝統にもとづく主題である。コジモ一世の時代には、文学者ドメニコ・ブルーニが『女性弁護論 Difese delle donne』をエレオノーラに献呈している。この中でブルーニは、ユーディットや、アマゾンの女王の模範的な行動を引用しており、さらに公妃エレオノーラを、支配者の妻に相応しい美德を備える著名な女性の一人として、彼女を同時代の女性の規範であると高く賞賛した。

ガルドラーダに捧げられた部屋の部分的な図像解釈が近年提出されたものの、「公妃の間」の装飾全体におよぶ包括的な図像プログラムの解明はなされていない。公妃の最晩年に当たる時期に装飾が制作された「公妃の間」を、発表者は、彼女が生涯に独自に行なった政務活動を記念するため、「著名な女性達」の主題を用いて新たな自己表象を創出した空間であると考え、この解釈を本発表では図像と言説によって提示する。